

痤瘡癍痕に対する漢方療法の臨床的検討



ほう皮フ科クリニック 院長 許 郁江 先生

はじめに – 癍痕を残さないことが治療のゴール –

尋常性痤瘡患者のQOLは低く、特に感情面で強く阻害されている。一方で患者の多くは自己流に対処するため、治療のタイミングは遅れる傾向にある。痤瘡は、たとえ浅い炎症からでも癍痕ができるため、癍痕形成の予防には発症早期からの治療が必要であり、皮膚科医は癍痕を残さないことを治療のゴールに、早期からの積極的な介入と適切な外用/内服療法などの施行が必要である。

本邦の痤瘡治療は、近年新たな治療薬の登場により大きく進歩したが、これらの治療薬でも十分な効果が得られない場合には、柴苓湯の使用も考慮し、患者QOLの改善を図ることが求められる。

尋常性痤瘡の発症機序 – 4大要因と治療方法 –

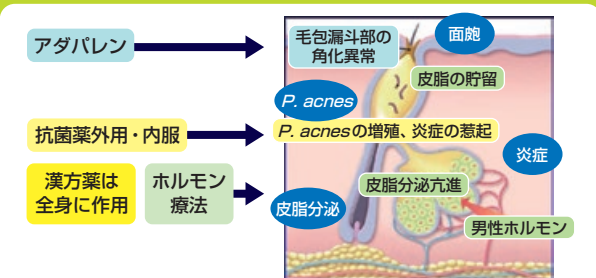
尋常性痤瘡の発症は毛包漏斗部の角化異常に始まり、ホルモンの影響などにより皮脂が過剰に分泌・貯留することで毛包の微小環境が変化し、アクネ菌 (*P.acnes*) が定着して炎症を惹起する。

このように痤瘡の発症要因は面皰・皮脂分泌・*P.acnes*・炎症であり、その治療は図2に示すとおりである。しかし、これらの治療で効果不十分の場合は、次の手段として内因性ステロイドホルモン誘導作用などの薬理作用を有し、手術後や熱傷・外傷によるケロイド・肥厚性癍痕に対する有効性が報告されている柴苓湯を使用する。

尋常性痤瘡に対する柴苓湯の臨床効果

柴苓湯の尋常性痤瘡に対する臨床効果を検討した。尋常性

図2 痤瘡の発症機序に対応した4大要因と治療



痤瘡で痤瘡癍痕があり、治療を希望した10例にクラシエ柴苓湯エキス細粒 (KB-114、8.1g/日・分2) を投与し、投与前および8～12週後に痤瘡癍痕の他覚所見、痤瘡癍痕および痤瘡の重症度 (SCAR-S) を観察し、スコアで評価した。

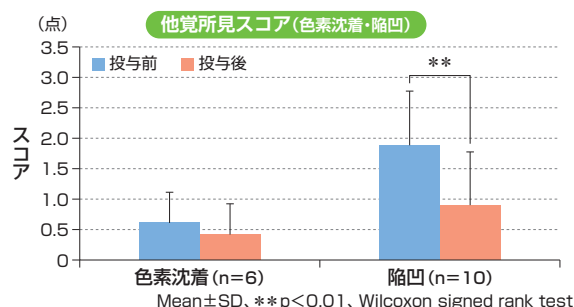
痤瘡癍痕の他覚所見は陥凹においてスコアの有意な改善が認められた。痤瘡癍痕の重症度は10例中9例に1段階の改善が認められ、スコアの平均値も有意に改善した。さらに、痤瘡の重症度は、治療前は重症5例、中等症2例、軽症3例であったが、柴苓湯の投与後では全例が1段階の改善を示し、投与前後において有意差 ($p < 0.05$) を認めた (図3)。

10例中9例は、痤瘡の治療および再発防止のためアダパレンやクリンダマイシンリン酸エステルを併用したが、痤瘡癍痕に対する治療歴を有する症例は2例のみであり、陥凹および痤瘡癍痕の重症度の改善は柴苓湯による効果と考えられた。

まとめ

本検討の結果から、痤瘡に対して従来の治療を継続し痤瘡癍痕の形成を予防すること、形成された痤瘡癍痕に対しては早期に柴苓湯による治療介入を行うことで、より良好な治療結果を得られる可能性が示唆された。

図3 尋常性痤瘡に対する柴苓湯の臨床効果



色素沈着、隆起、陥凹について4段階 (0: 目立たない、1: 症状が少しある、2: 症状あり、3: 症状が強い) で評価した。陥凹においてスコアの有意 ($p < 0.01$) な改善を認め、4例は「目立たない」となった。隆起は2例のみで、スコアは投与前1→投与後0と投与前2→投与後1であった。

